



- ☒ 話すこと
- ☐ 書くこと
- ☒ 個に応じた教材の作成や指導の充実
- ☐ パフォーマンステストでの活用
- ☒ 授業での活用
- ☐ 課外活動での活用
- ☒ 家庭学習での活用

実践の
ポイント

AIディベートシステムを活用した個別最適なスピーキング・ディベート活動の充実

実証概要

【学校単位での実証】＜校数＞3校(中等教育学校)＜人数＞395名 ＜学年＞中学:第3学年、高校:第1、2、3学年
＜アプリ等(共通)＞AIディベートシステム(PDA(弊会)で開発のディベート練習用AIシステム)
＜AI機能について＞本システムは、中学校・高等学校共通で活用した生成AI・会話型AIを用いたAIディベートシステムであり、授業・家庭学習・課外活動において、論理構成を意識しながら英語で発話する力の向上を目的とする。設定された論題に対し、主張→理由→例→主張の型に沿ったスピーチ練習および肯定・否定の応酬を行うディベート練習が可能である。各発話後にはAIがフィードバック、モデルスピーチ、語彙例、参考スコアを提示し、教員は学習進捗を把握できる。

AIの効果的な活用方法や取り組み (AI英語モデル校事業)

- 個に応じたスピーキング・ディベート練習の高度化)
生成AIを活用したAIディベートシステムにより、従来は教員による個別対応や十分な反復練習の確保が難しかった「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」の活動について、生徒一人ひとりの習熟度や課題に応じた個別最適な練習を実現した。具体的には、即時フィードバックやモデルスピーチ等を通じて、論理的に自分の考えを表現する力が身につく、言語活動に苦手意識をもつ生徒にも英語で話す機会を保障し、心理的負担の軽減につなげることができた。一覧化された発話内容をもとに、生徒一人ひとりの発話の論理性に対する教員の個別最適な指導・評価の充実につながった。
- 教科書と連動した授業内での論理的発話指導
授業では教科書の単元内容に即した論題を設定し、AIディベートシステムを用いて学年・学級単位で活用した。生徒は教科書で学んだ語彙や内容を用いながら、自身の意見を論理的に構成し、英語で表現する練習を行った。AIによるフィードバックを踏まえて改善を重ねることで、授業内でも十分な発話量と試行錯誤の時間を確保できた。教員は発話の正誤指導に追われることなく、論点設定や思考の深まりを支援するファシリテーターとしての役割を強化した。これにより、従来から重視されてきた「思考過程を見る指導」が、AI活用によってより実質的なものとなった。

実践成果の検証結果 (AI英語モデル校事業)

①生徒の英語力の向上 CEFRとの対応関係を有するPD検定を用いて比較した結果、総合平均は2.51から2.37へ変化し、CEFR A1～B1帯相当に大きな変化は見られなかった。一方、「具体例」(1.88→1.94)、「論題との関連性」(2.19→2.25)は向上し、論理構成や内容面での学習効果が確認された。	②生徒の関心・意欲の向上 AIから即時にフィードバックを得ながら個別に反復練習できる環境により、英語発話への心理的負担の軽減が見られた。事後アンケートでは「AIを利用した英語でのやり取りをリラックスしてできた」と回答した生徒が58%、授業時間外にAIを活用した生徒が68%となり、自主的な学習につながった。	③教師の指導の質と役割の変化 AI活用により、生徒の発話記録や学習状況を一覧的に把握できるようになり、個々の課題に応じた支援を行いやすくなった。また、一部教員からは、発音や文法の即時フィードバックをAIが担うことで、生徒の論理性や説得力に着目した指導へ重点を移しやすくなったとの声が見られた。
---	--	---

AI英語活用リーダーの育成や普及に関する取り組み (AI英語活用リーダー事業)

- AI英語活用リーダーの育成と実践知の普及
AI英語活用リーダーの育成を通じて、各学校における生成AIを活用した英語教育実践の中核人材を育成するとともに、学校間で実践知を共有し、持続的な普及体制の構築を図った。AI英語活用リーダーを対象に、授業・家庭学習・課外活動における効果的な活用方法を検討する研修を実施し、数か月ごとの発表機会を通じて、各校の実践改善と活用モデルの蓄積を進めた。また、PDAが関与する即興型英語ディベートのイベントにおいて、AI英語活用リーダー自身が実践事例や活用方法を発表・共有する機会を設けた。これにより、各校で蓄積された実践知の横展開が進むとともに、他校教員の関心喚起や実践導入の契機創出につながった。東京都内においては、教育委員会への情報提供や講評協力を行うとともに、中高一貫即興型英語ディベート交流大会等の枠組みとも接続しながら、実践知の共有を進めた。さらに、全国規模で展開されているPDAのネットワークを活用した成果発信を通じて、AI英語活用リーダー以外の教員にも取組が波及し、生成AIを活用した英語教育実践の普及促進につながった。

事業全体を通じた成果や課題、今後の取り組み (AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業)

本事業を通じて、生成AIを活用した英語スピーキングおよびディベート学習が、個に応じた学習支援と授業内での発話機会の拡充に有効であることが確認された。AIによる即時フィードバックや学習履歴の可視化により、生徒の英語力や学習意欲の向上に加え、教員が論理性や思考過程を重視した指導へと移行しやすくなった点が成果として挙げられる。

一方で、教員側のAI活用に対する理解度や実践経験には差があり、初期段階での操作支援や活用イメージの共有が課題として明らかになった。今後は、AI英語活用リーダーを核とした研修や実践共有の機会を継続的に設け、学校現場の状況に応じた活用モデルの蓄積と普及を図る。あわせて、有識者からの助言を取り入れながら、システム設計および指導方法の改善を重ね、持続的かつ汎用性の高いAI英語教育の展開を目指す。